

<実践報告>

二次障害のあるアスペルガー障害生が自己理解を深めるための支援
—本人の気持ちに寄り添う相談を通して—

宮田 恭子 塩尻市立塩尻中学校

上村恵津子 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

A Case Study of Supporting the Deepening of Self-Understanding of A Student
with Asperger's Disorder and Secondary Disorder

—Through Discussions That Emphasized in the Feelings and Emotions of the Student—

MIYATA Kyoko: Shiojiri Junior High School, Shiojiri City

KAMIMURA Etsuko: Center for Educational Research and Training, Faculty of Education,
Shinsyu University

研究の目的	アスペルガー障害生の特性に合わせた相談方法を検討する
キーワード	アスペルガー障害 相談活動 気持ちの共有 共同注意行動 自己理解
実践の目的	継続した定期的相談活動の実施
実践者名	第一著者と同じ
対象者	長野県K養護学校 高等部3年生 男子
実践期間	2007年4月～2008年1月
実践研究の方法と経過	対象生に週1回の継続した相談活動を実施し、相談内容を逐語録に起こし経過を追った。逐語録から対象生の質問を抽出して、質問全体に対する割合から客観的に変化を捉え、アスペルガー障害の特性に合わせた相談方法を検討した。
実践から得られた知見・提言	対象生に対して、感情に焦点を当ててではなく、興味ある行動レベルに焦点を当てることが、共同注意行動を取る頻度を増加させ、気持ちの共有につながった。また、話題を共有するにあたっては、写真の視覚的な手がかりが有効であった。これらの点は、アスペルガー障害の特徴と照らし合わせて理解することができる。

1. はじめに

特別支援学校高等部に在籍する発達障害生の多くは、不登校、非行、いじめ対象などの過去があり、挫折体験や叱責された経験が多く、自己肯定感が低い傾向にある。さらにこの時期、思春期の急激な心身の変化が重なり、情緒的に不安定で問題が複雑化しやすいという特徴を持つ。

K 養護学校高等部ではアスペルガー障害生をグループ編成し、集団として教育活動を行っているが、コミュニケーション能力に課題があったり、二次的な障害が見られることもあった。そのため、集団教育活動へ参加できなくなったり、不登校、問題行動の頻発、対人関係のトラブルといった問題が表面化した。

こういった問題状況に対しては、チームで行動理論によるアプローチを試みたが、要因が複雑であるため、なかなか行動修正することができず、対象生が自己肯定感をさらに低くさせてしまうなど逆効果も現れ始めた。保健室でも不適応を抱えた子ども達に相談活動を行って対応しているが、特にアスペルガー障害生については共通の感情体験を持ちにくいという特徴があるため、他の子どもたちのように、傾聴、共感による一般的な相談活動を展開していくことが難しく、心理的支援のあり方に行き詰まりを感じた。

森田(2000)は、保健室の相談活動について「まず情緒的混乱に対して、受容・共感的に話を聴く中で信頼関係をつくり、知識・情報を提供し、相談者が自己決定していけるように支援するものである」と述べている。これを受けて本研究では、アスペルガー障害生が自己へ向かうことができるような相談活動を目指し、共同注意行動を軸にしてアスペルガー障害の特性に合わせた相談活動のあり方について考察するものとする。

なお、共同注意行動とは、コミュニケーション発達における「対象に対する注意を他者と共有する行動(別府 1998)」である。1980年代以降、自閉症(アスペルガー障害)における共同注意行動の障害が注目されている。

仮説は以下のとおりである。

クライアントの興味関心に合わせて、共に考え・感じる相談を行うことにより、クライアントが自己への関心を高めることができる(自己に関する質問が増加する)。このことにより、クライアントは特定の他者へ自己の経験や考えを語るができるようになる。

2. 方法

2.1 対象生

K 養護学校 高等部3年生 アスペルガー障害男子(クライアント:以下 CI と記す)2000年に実施した WISC-IIIの結果は、FIQ68, VIQ68, PIQ73であった。こだわり行動の1つとして、特定女子への攻撃行動、接触行動がある。担任や養護教諭(school nurse:以下 SN と記す)の行動観察からは、コミュニケーション能力が未熟で困難な状況を他者へ伝えることができないため、様々なストレス要因が重なって攻撃行動・接触行動として表出すると考えられた。また他者に否定される経験が多いため、そういった言動が刺激になって感情コントロールができなくなり、欲求のまま接触行動を行うと推察できた。

2.2 期間 平成19年4月6日～平成20年1月25日

2.3 実施者 K養護学校 養護教諭 (SN) 平成19年度1年間、大学で長期研修中

2.4 手続き

(1)相談時間の設定

毎週1回, 2時間30分程度, CIの在籍K養護学校相談室において個別相談を実施する。なお, CIについては問題認識力, コミュニケーション力, 表現力が未熟であり, 通常の相談時間では表現内容に限界が見られた。また相談の開始時間厳守が難しいと考えられたため, 本人の状態に合わせたゆとりある時間枠の設定を行った。

(2)相談時間は全て録音を実施することを説明し, 了解を得る。

(3)毎回相談終了後, データを逐語録に起こし, 大学准教授からスーパーバイズを受け, 次の相談を実施した。定期的に相談を継続し, 経過を追った。

3. 経過 「」CIの発話, <>SNの発話

3.1 アセスメント期 (平成19年4月6日～平成19年7月20日 計12回)

(1)アセスメント期相談の目標

自己の感情理解, 感情表現を援助し, 感情の明確化を通して, CIと気持ちを分かち合う

(2)アセスメント期相談経過

・CIの発話内容は, 自己の欲求や他者への要求に関するものが多く, トピックの一貫性に欠け, 断片的な情報や「丸か, 四角か」といった無意味な言葉を繰り返すなど, 大切な要点や問題が掴みにくかった。そこで発話された少ない情報について, 5W1Hの詳しい質問を行うことや人物の行動を図式化して整理することとした。その結果, CIの問題が互いに確認しやすくなった。視覚的に図式化したことはCIにとって「そんなことあったね」など経験を想起しやすい状況にもつながった。

・CIが気持ちを意識できるような質問を活用して相談を行ったが, CIは感情を表現することでSNと問題を共有したいという意味を持つまでには至らなかった。実際にはく逃げられると, どういう気持ちになる?>「逃げるなっていう感じだよ」, <どういう気持ちなの?>「赤ちゃんとして, 扱っている」, などであった。中には, 「すごく残念でした」, 「本当に迷惑しているんですよ」など感情を伝えようとしている場面も見られたため, 共感している気持ちを伝えた。しかし, <A君は迷惑して, 本当にギリギリだなって思っていたよ>「・・・」, <A君は好きなんだね>「猫かぶり, 猫ですか?」など共感されたことに対して無反応になることや戸惑ってしまう場面が見られた。

(3)アセスメント期結果

相談場面では, CIはSNに擬態語や感情語で共感を示されても, 理解することができなかつたり, 気持ちを聞かれた質問に対し, 自分や他者の行動表現で返答を行った。感情の理解や表現が困難なアスペルガー障害の特徴を踏まえ, 展開期第1期は行動表現でフィードバックを行って, CIに理解を示すと共に, 基本的な気持ちのつながりができるような経験や活動を行うこととした。

3.2 展開期第1期（平成19年8月29日～平成19年11月2日 計9回）

(1)展開期第1期の相談目標

CIの興味関心ある内容を共に考え、感じる経験を通して、行動面でフィードバックし共有する

(2)展開期第1期相談の経過

・相談開始時に話したいキーワードを確認して、CIの興味関心のあるトピックの内容を提示した。その内容に寄り添って相談を行ったところ、赤ちゃん、バス路線、旅等の内容が中心になった。CIは興味関心ある内容をSNに理解させようと、自作の路線図や時刻表などを積極的に見せ、興味関心に関わる資料や調べた情報を自ら準備することが多くなった。また、トピックの内容やSNの経験知識を質問する姿が多く見られ、積極的にコミュニケーションを取ろうとした。SNへ「次はいつ来ますか」「メキシコと中国の写真をお願いします」など、トピックの共有に関する依頼等、必要事項を伝えられるようになった。

・気持ちを共有するために行動面でフィードバックを行ったところ「ここから、歩いて歩いて」<歩いたんだ>「うん、さすがに遠かったな」<遠いでしょう、良く歩いたね>20分ぐらいかかったかな」など会話が続くようになり、発話する中から「さすがに遠かったな」、「困るんだもん」など気持ちの表現が自然に出てくるようになった。

・1つ1つのトピックについてCIが気になっている要点を明確化することや、つながりを指摘することによって、断片的なトピック同士のつながりが理解でき、CIの大切な要点を共有しやすくなった。トピックとCIの要点を結びつけながら相談を行っている中で、10月頃には「英語がしゃべれないで外国行くのは自殺行為かな？ 私はあんまりしゃべらないんだ」など自分の状況や能力とを関連させて話をする場面が見られた。また「イギリス人は羨ましいね」など自己と他者を比較して気持ちを表現する言葉も発せられた。

(3)展開期第1期相談の結果

CIに行動面でフィードバックすることによって、CIは、状況をイメージしやすい返答や感情を含めた返答を行うようになった。また会話が續いて、CIの気持ちが推測しやすくなった。さらにトピックの内容と自己とを関連付けて語る場面が見られ、自己へ関心が持てるようになってきた。展開期第2期は来年の進路に向けて自分の現状について考える場面を大切にしながら、経験を共有するよう心がけることとした。

3.3 展開期第2期（平成19年11月9日～平成20年1月25日 計8回）

(1)展開期第2期の相談目標

CIの事実や経験を聞く中から、CIの考えや気持ちを理解して共有する

(2)展開期第2期相談の経過

・進路の検討時期に来て、職業実習が多く計画されるようになったために、相談内容も、実習、進路、日常生活についての現状についての発話が多くなってきた。相談開始時に話したいトピックの選択を促したが、なかなか決められないことが多かった。自分の実習経験について、携帯やデジカメをコミュニケーションのツールとして利用しながら説明した。

さらに、CIの意図がSNに伝わらなかった内容については、次の面談までに写真、動画など補足資料を準備し、再度説明する意欲も見られた。

・複雑な内容は、事実、CIの希望、考えなどに整理しながら現状の問題を理解して、気持ちを共有していった。気持ちに添って行く中で、例えば昔、何か言われて嫌な思いをしたかな?>「中学の時に先生が替わって、女の味方について大変でさ、どんなに苦労したかって。女の味方になっているから当然嫌ですよ」<女子の味方についたんだ>「厳しいですよ?」など過去の辛かった経験を語ることへつながったり、「本心は触りたいって思うよね」<Bさんに気持ちがあるの?>「何かね、寂しい感じがするんですよ」といった自分の本心を素直に表現するようにもなった。

・CIの質問の中でSNへ「そう思わない?」、「思うでしょ?」など同意を求める場面が多くなり、質問に対する返答を聞いて「なるほど」、「その通り」、「そうかも知れない」などSNに同調する様子も見られた。また「自分は世話にならないと、生きていけないことに気がついた」、「そのころ私は本能のまま生きていた」など客観的に自己を理解し、表現するまでになった。

・相談中に、お互い言葉が重なる場面では「何て言いましたか?」など相手の発言を確認した。アイコンタクトも多くなり、SNの非言語的コミュニケーションを理解する姿が増えるなど、相互交流が行えるようになってきた。また「難しい質問になってきた」、「もう1回言ってくれますか?」など自分の置かれている状況を理解し、SNへ伝えられるようにもなった。しかし、SNから状況や理由を説明しながら質問された場合は、質問自体が長くなってしまいうために、適切に返答できないこともあった。

(3)展開期第2期相談の結果

SNの非言語的コミュニケーションを理解するようになり、相互交流によって、自分の状況を適切に伝えられるようになってきた。自己を客観的に語ったり、自分の考えが正しいか質問するなど、他者から見た自分を意識するようになった上、過去の辛い経験や本音を自ら語る姿が見られたり、SNに同意を求める姿が多くなった。

3.4 経過の考察

アセスメント期では、アスペルガー障害生に対して感情に焦点を当てた相談活動を行ったが、感情を明確化することができず、CIを共感的に理解することにつながらなかった。また、アセスメント期にCIの表現する感情に焦点を当てると、怒り、喜びなど一次的情動レベルであると判断できた。共感的に理解されるためには、他者の気持ちの理解が必要だが、アセスメント期は他者の気持ちが理解できる発達段階までに達していなかったことが分かった。このことは、「二次的な情動である共感とは、その生起に自己意識の関与、あるいは自己及び他者という観点からの事象の評価がなければいかなる意味でも生起し得ない。」(Lewis1993)ことから裏付けされる。CIの発達段階を捉えると共に、困難なことへ直接働きかけるのではなくCIに合ったレベルで理解を示して行くことが大切だと考え、展開期第1期はCIの使っている行動表現でフィードバックすることとした。

展開期第1期では、CIの興味関心に寄り添うことによって、CI自身の共有したい意欲や動機が高まること分かった。CIの意欲に添いながら、視覚的な媒体を活用したトピックの共有、行動表現によるフィードバックを行ったことで、楽しい、不思議、ひどいなど気持ちを言葉によって表現するようになり、SNもその気持ちを同時に感じている場面がしばしばあった。これがアスペルガー障害生と気持ちを共有することなのだ実感した。10月頃には、SNが携帯電話の着信を確認した様子を見て「ところで今、忙しい？」と質問したが、それはSNのちょっとした行動や視線を敏感に捉えられたものと推察できる。

展開期第2期には、相互交流のコミュニケーションがよりスムーズに行えるようになったが、それは開始時にトピックをCIに決めてもらうように心がけたことや、コミュニケーションの媒体を活用することによるものと考えられた。CIの進路や関心事の話題が中心であったが、複雑な内容についてはSNが質問しながら視覚的に要点をまとめたことがCIにとっては問題や困難が考えやすくなったように思われる。しかし、SNからの状況説明が長い質問では、何を聞かれているか分からなくなってしまったり、質問の意図を取り違えたりする場面が見られ、意図を明確にした短い質問を行うことが重要であると分かった。このように状況を整理しながら問題や解決策と一緒に考えて行くことでCI自身の気持ちの理解や整理につながり、自分の感情を多く語るCIの姿が見られるようになったと考えられる。過去の辛い経験や本音を自ら語る姿が見られたことは、SNの気持ちを理解した上で、自分の気持ちを共有してもらうことによって、安心感が得られようになったのではないかと推察できる。

経過を通して、CIから発話された質問は、トピックや時期によって質的な違いが大きいと感じられた。その質問の変化を分析することによってCIの変化を客観的な視点から捉えることができるのではないかと考え、次に質問分析を行うこととした。

4. 質問分析

4.1 分析方法

(1)質問分析実施の理由

- ・質問はCIの関心やその変化を知ることができると考えた。
- ・質問は他者による言語的フィードバックが必要であり、相談において相互作用を分析する手段と考えた。

(2)分析手続き

分析対象は各月最終週の相談とし、対象逐語録からCIの発話した質問を抽出した。なお、質問とは疑問形を取り、聞き手にフィードバックを求めるものとする。まず抽出した質問文を主語により[CIに関する質問](A)、[SNに関する質問](B)、[CI・SN以外の者に関する質問](C)、[人物以外の質問](D)、[自問自答](E)に分類する。また主語が事物になるものでも、動作の主体が人物特定できるものをA、B、Cに分類する。そしてカテゴリー別に全質問に対する割合で各回の変化を分析する。分類する質問カテゴリーは表1の通りである。さらに経過の中から、トピックによって各回の質問内容に質的な違いが推

測されたため、CIの具体的な変化を知るために[CIに関する質問]については、機能によって細分化し、分類分析を行うこととした。CIに関する質問機能分類は表2のように考えた。

表1 主語による分類

主語による分類
A, CIに関する質問
B, SNに関する質問
C, CI・SN以外の者に関する質問
D, 人物以外の質問
E, 自問自答

表2 CIに関する質問の機能分類

CIに関する質問の機能分類
A-a 課題に関する質問
A-b 思考・感情・知覚に関する質問
A-c SNへの行動確認(CIの行動)

※なお上記A-bは思考、感情、知覚を表す、もしくはそれに準ずる表現を含む質問文とした。

4.2 結果, 考察

(1)主語による分類

表1の主語による分類カテゴリーの通り質問を分類し、各回の変化を見た。相談による自己理解の変容を客観的に捉えるために、[CIに関する質問]割合に注目してみると、介入後経過と共に増加傾向であった。このことは、相談によって自分自身に関心が向いてきたことに起因するものと考えられる。また、相談においてSNとの相互交流の様子を分析するため、[SNに関する質問]割合に注目してみると変化に規則性はなかったが、各回におけるCIの質問内容に違いが見られた。中でも10月には「野菜が食べたいだろう？」などSNの意思を推測したり「なぜ、メキシコ行ったの？」など行動の意図を質問する様子が見られた。さらに11月には「4月になればアルバイトはいらないと思うよ、そう思わない？」など自分の考えを言ってSNの考えを問うことがあった。これはSNの意思に意識が向いてきたために起こった質問なのではないかと考えられる。

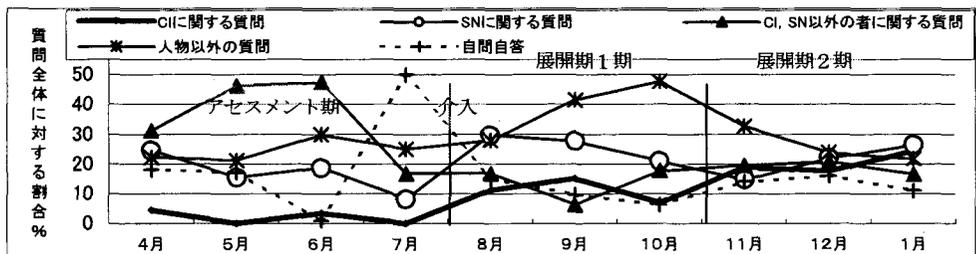


図1 各月全質問に対する質問カテゴリー別割合

(2)CIに関する質問の機能分類

図1の[CIに関する質問]を表2の通り、3機能に分類する。推移や変化を見るために、1時間あたりの機能別質問数の変化を分析するものとする。結果は図2の通りである。

図2の機能別分類で特に注目したいのは[SNへの行動確認]数で、6月には質問数は少ないが、9月に最大となって、10月より減少に転じている点である。具体的な[SNへの行動確認]の内容は、6月は「見せましたっけ」など過去のCIの行動確認であったが、8月からは「持ってこようか?」、「説明しますか?」など、CIが起こそうとする行動に対してSNの意思を確認していた。展開期第1期はCIの興味関心あるトピックに寄り添ったこ

とで、SN とトピックを共有するために意思確認を行い、共同注意行動を取ったのではないかと推察した。10、11 月頃にこの [SN への行動確認] 数が減少していることと、逆に [課題に関する質問] 数や [思考・感情・知覚に関する質問] 数が徐々に増加しているのは、10、11 月頃に CI が自己の課題について考え、表現する場面が多くなったからではないかと考えられる。[課題に関する質問] とは、「通信制の大学に通うことは、可能なんですかね?」、「パソコンが得意なので、そこで生かされますよね?」などで、[思考・感情・知覚に関する質問] とは、「ちょっと心配だけど、大丈夫でしょ?」、「厳しいですよ?」などである。

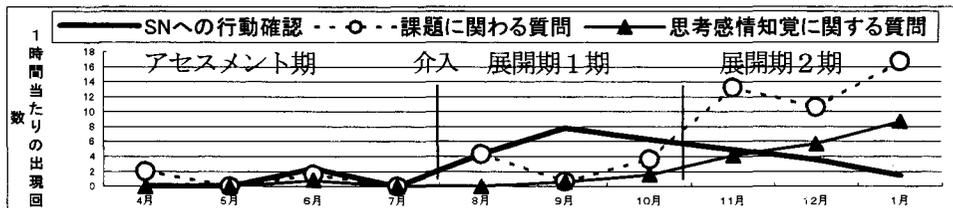


図2 CIに関する質問における機能別質問数の変化

(3)質問分析の考察

質問分析と経過の行動観察を合わせて考察する。[CIに関する質問]の機能別分類から、8月よりSNの意思を知るために[SNへの行動確認]をして共同注意行動を取ったと見られたが、10月には質問による[SNへの行動確認]数が減少した。また10月頃から、[SNに関する質問]では、SNの意思を推測した質問が多く見られるようになったり、経過の行動観察からはアイコンタクトが増加し、SNのわずかな動きを察知する姿が見られるようになった。別府(1998)は「バロン・コーエンは、『心の理論』について発達の起源のモジュール(システム部分)として、4つを提起している。(1)意図検出器(2)視線方向検知器(3)共有注意の機構(4)心の理論機構。自閉症の心の理論が持てない(4)の障害)のは、(3)の共有注意の機構に障害があるからだとし、その発達の起源を共同注意行動の障害に見ようとする。」と述べている。これと照らし合わせると、CIは8月頃から共同注意行動を取るために(3)に対応、SNの意思が大切だと意識し始め(上記(4)に対応)さらにCIが質問による意思確認を行いながら継続的にコミュニケーションを取ったことによって、SNの視線など非言語的コミュニケーションを理解し(2)に対応、SNの意思が推測できるようになってきた(1)に対応と捉えることができる。

つまり、10月頃より徐々に[SNへの行動確認]数が減ったのは、特定の他者であるSNの非言語的な行動からトピックが共有できていると理解したからだと考えられる。逆に、[課題に関する質問]数、[思考・感情・知覚に関する質問]数が増加したのは、SNの意思が分かって自分が理解されているという安心感から、自分の課題や気持ちを表現できるようになったり、自分の考えとSNの考えとを比較するようになったからだと推察できる。

5. 考察

本研究では、アスペルガー障害の特性に合わせた相談活動のあり方を検討してきた。ア

スペルガー障害生の気持ちに寄り添う、共同注意行動の変化、自己の課題解決に向かう、アスペルガー障害生との相談における留意点について考察する。

5.1 アスペルガー障害生への共感とは

相談活動において、CIの感情を理解してその気持ちに共感していくことは、CIが成長するために大切なことである。しかし、感情理解が苦手なアスペルガー障害生にとって「共感」は簡単に理解することができない感情であることが分かった。「共感」は自分の気持ちと他者の気持ちを理解することが前提条件だと考えられるからである。だからこそ、他者から共感される気持ちを理解できる形でCIにフィードバックする必要があると思われた。

それはSNが感じた気持ちや推測した気持ちを、CIの使っている言葉や行動表現によってフィードバックしたことであったように思う。角田(1998)は『『私』の気持ちが理解され、『他者』から返されることがあって、初めて自分の中で起こった心の動きは、意味づけされ自分のものとなる』と述べている。アスペルガー障害生にとっては、行動表現によるフィードバックを受けることによって、他者から理解されたという肯定的な気持ちが起こったのだろう。それが「この人と経験を共有したい」という動機になり、他者から理解されてのコミュニケーションの継続によって、気持ちのつながりができたのではないかと思われた。

5.2 共同注意行動の変化から考える

本研究において、共同注意行動の視点から考察する。(ここでは、共同注意行動を「対象に対する注意を他者と共有する行動」と定義する。)展開期第1期には、アスペルガー障害生の興味関心へ寄り添ったことにより、SNの意思確認を伴う共同注意行動を増加させた。しかし展開期第2期には、SNの意思確認を伴わない共同注意行動が取れるようになった。このことは、非言語的なコミュニケーションなどからSNの意思を推測し、確認しなくても共同注意行動が取れるように変容したと推測できた。共同注意行動は「心の理論」の発達の前身としての意味があるとも言われている。「心の理解は、その前提として他者と心を通い合わせたいという動機が存在が必要であり、共同注意行動には同じ対象に注意を共有する行動があるだけでなく、他者と興味や注意を共有したい動機があるからこそ成立する行動である点に両者を結びつけるものがあると考えている(別府1998)」からである。

これらのことより、展開期第1期には、CI自身が繰り返し共同注意行動を起こし、興味や注意を共有したいと意欲が高まったこと、相談によって自分を理解してくれるSNと気持ちを共有したいと感じたことによって、CIがSNの意思などを意識したと推察できた。アスペルガー障害の人たちと気持ちを共有するための手がかりは、彼らの興味関心ある内容に深く寄り添っていくことであって、それを継続することによって自分の持つものとは異なる他者の思考、感情などを知ることにつながっていくことが明らかになった。

5.3 自己の課題解決に向かう

一方展開期第2期には、スムーズに共同注意行動ができるようになったことから、相談活動という特定の他者との相互交流コミュニケーションによって、トピックの内容を確実

に共有できるようになった。また、他者の意思や行動の意図を推測したり、意思を聞くことによって、他者と自分を比較したり、他者から見た自分を意識するような質問を行うなど、自己を客観的に捉えることができるように変化した。

さらに、SN と気持ちが共有できるようになったことから、自分の気持ちを共有してもらうことの実感が得られ、自己の課題や過去の辛い経験など本音を語る事ができたと考えられる。

5.4 アスペルガー障害生の相談における留意点

アスペルガー障害生との相談活動を行うに当たって、特性を考慮した留意点五つについて述べる。第一に CI が主体的にコミュニケーションを行うような状況を提供し、発話できるまで暖かく見守るなど、CI のペースに合わせていくことである。第二に 5W1H の質問を活用しながら端的に質問を行い、具体的に内容を把握することである。第三に相互交流のコミュニケーションを円滑に行うために、トピックのキーワードの提示やコミュニケーションの媒体を使うなど視覚的認知へ働きかける手段を活用することである。第四に必要な情報を焦点化(行動の理由など)するために、意図を明確にした質問を行うことである。第五に CI の興味関心ある断片的なトピックを共に考えて行く中で、トピック同士のつながりを指摘したり、CI にとって大切な価値や要点を探すことである。

6. 課題

今回の研究における質問分析では、CI に関する質問を中心に分析を行った。しかし、分類を進めていく中で、CI に関する質問以外にも様々な変化が予測できた。コミュニケーションなど違った視点から分析を行うことによって、アスペルガー障害生への相談や支援のあり方に、理解が深まるのではないかと考えられる。

また、学校現場では個にかかわる時間は限られていることから、個に対してどのように継続して気持ちを寄り添い関係を築いていくのが、今後の課題である。

文献

別府 哲, 1998, まなごしを共有することと自閉症, コミュニケーションという謎

シリーズ発達と障害を探る 1 巻, ミネルヴァ書房, PP.36-42

秦野悦子, 1998, 会話が成立するときしないとき, コミュニケーションという謎

シリーズ発達と障害を探る 1 巻, ミネルヴァ書房, PP.136-137

角田 豊, 1998, 共感体験とカウンセリング, 福村出版株式会社, PP.41-45

森田 光子, 2000, 養護教諭が行う健康相談活動, 東山書房, PP.30

大淵 憲一, 2005, 感情と人間関係の制御, 感情心理学, 第 1 章, PP.3-4

佐藤 静香, 2005, カウンセリングと感情, 感情心理学, 第 18 章, PP.142-145

高橋 雅延, 2002, 感情と心理学, 発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開, PP.14-15

(2008 年 4 月 1 日 受付)